

キャロル・サック姉の

Music Thanatology 音楽による看取りのケア

米国での2年間の研修を終えたキャロル・サック姉が日本に帰ってきました。姉が修めたのは Music Thanatology(音楽による看取りのケア*)で、その実践は日本のみならずアジアでも珍しいものです。姉がこの働きに関わるようになったきっかけ、働きそのものの歴史的背景、日本での実践内容等について本人から紹介していただきます。JELAは「音楽による看取りのケア」の働き人を養成するため、2004年に恵比寿に竣工予定の自社ビルにて、一般向け講座の開設を計画中です。

●死にゆく人のための音楽 キャロル・サック

6年前、神さまは私にいっぷう変わった方法で語りかけられました。当時、私はアイルランドの民族音楽用ハーブのレッスンを受けていて、その楽器の演奏を楽しんでいました。同じ時期に、娘が神経病理的な問題があると診断を受けました。それを知ったとき大変ショックでしたが、友人たちが祈ってくれたことは、大きな励ましと力になりました。そしてこの経験をとおして、いままで以上に祈りについて、とくに苦しみの中にある人々への祈りについて考えることとなりました。

以来、病に臥している人を病院や家庭に訪問し、その苦しみのためにとりなしの祈りをしてきました。5月のさわやかな東京の夜、私は小さなハーブを手に電車に乗っていました。そして、突然ひらめいたのです。この持ち運びに便利なハーブを用いて、ベッドのそばでお祈りをしてあげるのはどうだろうと。私は旧約聖書のダビデの話を思い



出しました。彼は詩篇をつくり、自分の堅琴を奏でながら詩篇を歌うことで、王サウルの心の苦悩をやわらげようと努めました。即座に私は理解しました。神さまが私をお造りになったのは、このためだったのだと。

喜ぶべきことに、その3ヵ月後に、モンタナ州ミゾーラの聖パトリック病院でユニークな音楽の講義が開かれていることを耳にしました。そこでは、死に瀕している人々のベッド際でハーブを弾きながら歌を歌う音楽療法士を養成していました。この領域は「音楽による看取りのケア」と呼ばれます。プログラムの存在を知り嬉しかったのですが、最初に思ったのは自分がそれに参加するのは無理だろうということでした。というのは、私は夫そして子どもたちと一緒に東京で暮らしていたからです。しかし、神さまは扉を開けてくださいました。日本福音ルーテル教会、米国福音ルーテル教会、そしてその海外宣教部門(DGM)の寛大な計らいによって、モンタナ州で2年間の集中プログラムを受ける道が開かれたのです。家族みんなでモンタナに移り住み、この神さまからの召命に従うことができたのは、本当に嬉しいことでした。

「音楽による看取りのケア」は歴史的には修道院の医術にその基礎をおいています。11世紀のフランスのクーニー地方のベネディクト会修道士た

ちは、精神的理想としての美に絶大な関心を抱いていました。彼らが美を追求したのは、それを神さまの恵みを体験できる手段の一つと考えたからです。そのため、美の表現、とくに音楽におけるそれに大きな関心を寄せました。修道士たちはまた、弱い者や病気の者を心から尊敬し、死に瀕している人をキリストご自身であるかのように大切に扱いました。彼らは死にゆく人は美に囲まれている必要があると考えていましたので、死に直面している人、あるいはすでに昇天しキリストのもとにいった人のためにグレゴリオ聖歌の様式で聖書のことばを歌い上げました。彼らはこれを、臨終の癒しと呼びました。

死につつある人のベッドの傍らで演奏される歌とハーブ演奏の美しさが病室を聖所に変えると私たちは信じています。私たちが提供する音楽はいつも生演奏です。患者さんの一刻一刻の生理的変化にあわせて奏する必要があるからです。演奏者ではなく患者さんが中心となり働きを導きます。そしてそのことが、死に近づきつつある人に、たとえその人が意識のない状態になっていたとしても、大いなる尊厳を与えます。45分から1時間の演奏のあいだに、患者さんが深い眠りに入ったあと元気を取りもどしたり、痛み止めの薬が必要でなくなることがしばしば起こります。演奏を聞いているとき、患者さんの心拍や呼吸は通常ゆっくりと落ち着いたものになります。愛する肉親が音楽の美に囲まれているのを目にすることは、患者さんの家族にも大きな癒しと慰めを与えているようです。

演奏する時、私はいつもそれを祈りとして行います。ふつうの演奏からイメージされるパフォーマンスやコンサートとしてではなく、私がするのは音楽という形をかりた祈りです。それは、ことばの真の意味における薬です。いままでやったどんなことよりも私はこの働きが好きです。というのは、音楽は深く人の心に届き、言葉・文化・宗教の壁を超えるからです。時にそれは奇跡的さえあります。四世紀の聖人アウグスティヌスは、歌う人は二度祈っている、と言いました。いま私はその意味がわかります。

私はこの働きを「希望の家」(Hope House)で実践しています。そこは、ホームレスの人がおおぜい暮らす東京・山谷に一年前にできたホスピスです。この家に住まう人々が永遠の休息にむけた準備に入るとき、イエス・キリストの愛とともに、これら兄弟姉妹のために奉仕できることは大きな特権であり名誉です。この人たちがクリスチャンであるか否かにかかわらず、キリストの愛が彼ら一人ひとりに触れてくださっていること、言葉ではうまく表現できませんが、私はそれを強く感じます。そして、そのことを神さまに感謝しています。



患者さんのベッドのわきでハーブを奏でるキャロル姉

*注：Music Thanatologyは「音楽死生学」と訳されることもありますが、ここではその実践的な意味を表現するために、「音楽による看取りのケア」という訳を用います。